日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第十一卷

河出書房版

現代日本小説大系　第十二卷

昭和二十五年九月十五日　初版發行
昭和二十七年十二月二十日　再版發行

定價　貳百參拾圓
地方定價　貳百四拾圓

著者代表　正宗白鳥

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
發行者　河出孝雄

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
編集者　中村光夫

横濱市中區鏡澤二十九番地
印刷者　土岐佐光

發行所　東京都千代田區神田小川町三ノ八　株式會社　河出書房
電話　神田(25)三一七四番

目次

正宗白鳥

塵埃……四
玉突屋……一一
何處へ……一四
五月幟……六三
徒勞……七四
微光……九七
泥人形……一三七

眞山青果

南小泉村……一六六

家鴨飼……三三五
茗荷畠……三四三
卓上……三六〇
久本氏……三六三

德田秋聲

黴……三七四
解說（中村光夫）……三八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

正宗白鳥

塵埃　玉突屋

何處へ　五月幟

徒勞　微光　泥人形

塵埃

「原稿出切り」と二面の編輯者は叫んで、兩手を伸ばし息を吐き、やがてゆらり〳〵と、ストーブの側へ寄つた。炎々たる火焰の惡どく暑くるしいストーブを煙で取卷いて、破れ椅子に坐してゐるもの、外套のまゝで立つてゐるもの。議會の問題や情夫殺しの消息、明日の雜報の註釋說明批評で賑はつてゐる。

「築島君、その女は美人かね。」編輯の岸上が一座の中へ割込んで問を發した。

「實際いゝ女ですよ、靑さめて沈んでる所は可憐です。僕はあんな女になら殺されても遺憾なしですね、裁判官たるもの宜しく刑一等を減ずべしだ。」三面の外勤築島に、煤けた顏に愛嬌笑ひをして表情的に云ふ。

「そんなのろい男は、殺されたくても、女の方で御免蒙るさ。」

「先づ何であらうと、僕は天命を保つて、十分に面白い日を送りたい。いくら色男になつても、出刃庖丁でずばりとやられちゃ駄目だからね。」硬派の大澤が立ちかゝつた。

「安心し給へ、見渡したところ、一座中そんな心配のありさうな人はないから。まあお互ひに銀座のほこりを毎日吸つて、ほこりの中の微菌に生血が吸はれつちまふまで生きてるのさ。つまり天壽を保つ者は濟し崩しに枯れて行くんだよ。しかしね、稚い木が風に折られてるのを見ると、多少風情があるが、蟲に喰はれた枯木を見ると淺間しくなる。こんな枯木的人間が到る處にあるぢやないか。」

「岸上流の哲學か。」と大澤は時計を見て、綠の剝げた山高を被り、「どりゃ枯木伯大枝の駄法螺を聞きに行かうか。」と、戸口へ行つた。

「枯木でも風が當りゃ鳴るんだ、大枝なんか、つまり悲鳴を揚げてるのさ。」

一座はそれ〴〵自分の席へ歸つて、編輯局は暫らく靜かになつた。予は北側の机で、窓硝子の壞れから吹き込む鋭い風に、脊筋を揉まれながら、小野道吉君と差向ひで、校正に從事して局外から編輯の光景を窺つてゐる。南米遠征の企ての破れてより、何か有望の事業に取りかゝる迄の糊口のためにと、或人の周旋でこの社の校正掛となつたのだが、何時の間にやら、もう三ヶ月になつた。こんな下らない仕事を男子が勤めてゐて溜るものかと思ひながら、詮方なさの一日逃れで、

撼天動地の抱負を胸裡に潜め、鐵啞鈴で鍛へた手に禿筆を握つて、死灰の文字をほじくつてゐるのだ。で、校正刷の堆積が一先づ片付くと、予は机に肱を突いて、外ながら外交記者の壯語澤山の太平樂に耳を傾け、あの人達は、毎日内閣や議會に出入し、天下の名士と席を同じうして語り、酒酌みかはして懇談する身でありながら、何故立身榮達の道を開かず、ストーブで炙つた食パンを食つて、鬢髪徒らに白線を加ふるに至つたのであらう。明けて二十六となるべき予は、社中最も年少の組であつて、今こそ破れ布子で髪蓬々としてゐるが、明年を思ひ明後年を考へれば、想像の絲は己れを中心に、幾百の豐かなる繪畫や小說を織り出す、艶麗な景も浮べば、勇壯な潮も湧く。今二三日で四十歲になる、五十歲になると云ひながら、腰辨の身を哀れとも感せず、無駄話に笑ひ興じてゐる彼の人々の氣が知れぬ。予は若しも四十幾歲まで、この籐椅子の網が尻ですり切れるまで、この渦卷く編輯局の塵埃を吸はねばならぬと、天命の定まつてゐるとすれば、未練はない。今日此處で舌を嚙んで死んで見せる。食パンの味ひは一度で澤山だ、三百六十五日晝の辨當にして味ふ必要はあるまい。自分の一生が食パンだとすれば、二三年經驗すれば足つてゐる、何も五十迄も六十迄も食パン生涯を續けるにも及ぶまい。

かく思ひながら小野君を見ると、小野君は雁首のへこんだ眞鍮の煙管で臭い煙草を吸ひながら、社内の騷ぎも耳に入らぬやうに、ぼんやり窓を眺めてゐる。まだ染々話もせぬが、頭が胡麻鹽になるまで三十幾年この社に勤勞してゐるので、この社創立以來、社で育ち社で老いた三人の一人であるさうだ。

「どうです、小野さん、今夜はかねての約束を實行して、何處かで、一杯やらうぢやありませんか。」と、予は小聲で云つた。今日は月給日なれば、どうせ一杯やらずにはゐられぬので、一人よりは二人の方が興が多いから、仲間に引込まうとした。小野君はにやり〳〵笑つて、暫らく考へてゐたが、

「さうですねえ、一度だけお附合しませうか、何處か安直な所で。」と、やうやく同意らしい返事をする。

やがて編輯員は一人減り二人減り、六時になると、夜勤の津崎が懷手で、のそり〳〵と入つて來て、肥滿な呑氣な顏を電氣の光にさらし、けたゝましく嚏をして、「畜生、風を引きさうだぞ。」と云ひながら、袂から瓶詰を出して、「今夜は一人で忘年會だ、給仕、鰯でも買つて來て呉れ。」

「又電報を間違へて貶まれんやうにし給へ。」と、岸上は歸り支度で二版の大刷を見ながら云つた。

「なあに、勤める所は屹度勤めるさ。これでもね、雪が降らうが、風が吹かうが、子の刻までは關所を預かつて、勤勞無二の僕だからこそ、添けなくも年末賞與大枚十圓を頂戴したのぢやないか、爲すべきものは忠義だね。」と笑ひながら云つたが、急に悄氣て、「しかしね、岸上君、今年は僕もつく〳〵

歳晩の感を起したよ。」

「さうか、君の感慨なら、先づ冷酒の飲むべからざる所以か、前借の慨むべき所以ぐらゐだらう。」

「いや、僕は眞面目に感じたのだ。もう夜勤も二年だが、得た所は、體量が一貫目ばかり衰へて近眼が數度を加へた位だ。實は今日晝寢から起きて考へたね、十兩の恩賜は有難いが、今年になつて、風邪に罹ること七度、下痢をすること三度だよ、何のことはない、肉を殺ぎ血を絞つた結果だと思へば、あの僅かな金に恨がある。」

「でも君は肥つてるから、自分で自分の身を食つても食ひであらあ、はゝゝ。」岸上は靴の音高く階子段を駈け下つた。

津崎は今日は珍らしく、不平を並べたい風で、校正の席へ來て、皺くちやの夫刷をのばし、目を顰めて點檢せる小野君の側に立ち、

「小野さん、もう四五日しかありませんね。」

「さうですね、又一つ歳を取りますよ。」

「小野さんは月日を超脱してるから羨ましい、僕も去年までは自分の歳を忘れてゐたんだが、この暮は妙に氣になる。」

津崎といふ男、常に給仕を相手に、シャツ一枚になつて相撲を取り、或は冷酒を呷つて都々一を唄つたりするので、社中第一の氣樂者と思つてゐたのに、今夜は魔がさしたやうに、哀れつぽいことを云ふのを、予は不思議がつてゐた。

「なあに、歳を取るのが氣になる間が結構でさあ。」

小野君は氣のない調子であつたが、役目を濟ますと、予を促して、早速社を退いて銀座の賑かな通りに出た。屋は氷のやうに燦いて、風はなくとも、皮膚の隙間に觸れる空氣は針のやうだが、街上は暮の忙しさを集めて活氣に滿ちてゐる。で、小野君が垢染みた襟卷に首を埋めて、元氣なくしよんぼりと立つてゐるのは、如何にも見すぼらしく、場所違ひの氣味がする。予は福神漬を買つて、「何處へ行かう。」と訊いたが、小野君は頻りに「安直の處」を繰返すのみである。予は京橋附近で飲食したことはないので、牛屋へでも一寸氣臆れがして入りかねる。いつそお馴染の本郷にしようと、電車に乘つた。予は菊坂の豆腐屋の二階を借りて自炊して、電車で通つてゐるが、小野君は小石川諏訪町から徒歩で京橋へ行くので、嵐か大雪ででもなければ、嘗てこの文明の恩澤に浴したことはないのである。

本郷三丁目の停留場から一町許りして、色の褪せた紺暖簾に「蛇の目鮨」と白く染め出した家がある。狹くはあり、綺麗でもないが、予が自炊の面倒な時に駈け込む、筋向ひの繩暖簾に比べれば、疊に坐るだけでも勝つてゐる。殊に此處のみは、滅多に學生に犯されないのが有難い。本郷一面西洋料理といひ、ビヤホールといひ、大學や高等學校の學生が、月末に郵便局から引出した金で、贅をやる處のみだが、此處は暖簾

の汚れてるお蔭か、お客は大抵予等と同類で、塵埃の中から捜し出した金を使ふのだ。

予は火鉢を眞中に、小野君と差向ひで坐つて、獨斷で、かき卵、ヌタ、甘煮などを命じた。小野君は乾からびた手の甲を火鉢の上でこすつてゐるが、食パン生涯の結果か、顏に汁氣がなく、目はどんよりして何處を見てゐるのか分らない。

「僕にはまだ分りませんが、新聞の仕事も思つた程いゝものでもありませんね。」と、予は默つてゐるのも氣が詰るから、強ひて話の緒を開いた。

「さうですとも、何をやつてもねえ。」と、小野君も言譯丈の返事をして、氣乘りがしない。又二人は默つてゐる。外は俥の掛聲、下駄の音、威勢よく叫ぶ聲、非常の騷ぎであるが、小野君は社にゐると同じく、四面の騷ぎは耳に入らぬやうで、煙草すら吸はない。神經は無くなつたのであらうか、感覺は消滅したのであらうか。これではパンとビフテキと、酒と茶との區別もないのであらう、二十年も坐らされたきり、一つ處にぢつとしてゐるのも無理はない。生れて以來、蓆は厭だ、絹蒲團に坐りたいと、假初にも思つたことはないと見える。

「でも貴方はよく長く社に辛抱してゐますね。」

「へゝゝゝ、まあ仕方がありませんのさ。」

女中が霜脹れの手で、膳を突き付けるやうに並べて、銚子からは湯氣が立つてゐる。予が滿々とついだのを、小野君は一口に飲干したが、流石にこれにまで無神經ではないと見え、急に人相が變つて來る。二杯三杯と、予もいゝ氣持になつたが、小野君は木彫の像に魂が入つたやうに筋肉がゆるやかに動き出した。

「貴方は隨分いけるやうですね。」

「まあ好きな方ですよ、矢張酒といふ奴あ旨いもんだ。」と、餘瀝を舐めて、疊の上に置いた杯を眺め、背を丸くしてぐつたりしてゐる。

「そりや結構だ、私なぞは酒がそんなに甘いつていふ譯ぢやないんだが、獨り身で、外に樂みもないから、仕方なしに飲むんです。」

「しかし仕方なしにでも飲める方が、呑みたくても飲めんよりや結構でさあ、はゝゝゝ、いや全く貴方が羨ましい。」

「僕が羨ましいつていふんですか。」

「私は悪い癖があつてね、酒を飲むと、若い人が羨ましくなつたり、自分の身が哀れつぽくなつて仕樣がないんですよ。平生は何の氣なしに聞いたり見たりしたことが、急にむらむらと思出されるんでしてな。」

「さうですか、ぢや一つ、その思出した所を承りたいもんだ。」

予はこの木像が何を思つてゐるかと、一方ならず面白くな

つて、矢鱈にお酌をした。

「なあに私達の思つてゐることはね、皆な下らないことでさあ。よく原稿にある文句だが、碌々として老いるつていふのは先づ私達のことでせう、一體碌々といふ文字は、先生方はどんな意味で遣つてるんか知りませんがね、私は『碌々』の中には、いろんなつらい思ひが打込まれてるんだと獨り定めにしてるんです。碌々として老いるつて、決して呑氣にぼんやりして老いるんぢやない。」と、ぐつたりと垂れてる首を振つたが、急に反身になつて、「はゝゝゝゝゝ、まあ人間は若い間、若い間、さ、差上げませう。」と、聲も艶を持つて、今迄の小野君の喉から出たとは思へない。

「貴方は馬鹿に長くお勤めなすつたんだから、新聞生活はよくお存じでせう、これで精勤すれば有望なものですかね。」

「さあ、それですよ、全體世の中に職務を忠實に盡してりや、それで自然に立身するつていふことはあるんですかね。」

「無論あるでせう、又さうなくちやならん譯だ。僕はまだ世間の經驗に乏しいけれど、よく雜誌なんかの成功談に出てるぢやありませんか。」

「はゝゝ、雜誌や新聞に虚言がないものならばねえ、いや活字の誤植よりや、書く人が腹の中の誤植を正す方がいゝのさ。」

「何しろ校正係は張合のない仕事だ、僕も早くどうかしなくちや。」

「さ、私も昔は度々さう思ひましたがね、思つてる間に、ずん〳〵月日は立つてしまふ。しかしまだどうかしようと思つてゐる間は頼もしいが、私達はどうかなるだらうで日を送るんですよ。」

「だが、その方が氣樂でいゝかも知れん。」

「まあね、初めの間は波の中でぼちや〳〵やつてまさあ、それが次第に大きな波が幾度も〳〵押かぶせて來りや、どうせ叶はないから勝手にしろと、流され放題に目を瞑るやうになります。社でも、隨分波が立つんですが、私達のやうに拔手の切れない者は、其度にぎよつとして、手足が萎けて了ふ。萎けた擧句が碌々として老いるんですよ。」

窪んだ目緣がほんのりと紅くなつて、眠つてゐた目が燦く。

それから暫らくは無言で、看をつゝき杯を干してゐた。紺暖簾が寒い風にゆらめいては、隙間から人影が絶えずちらつく。室内には自分等の外に、片隅に外套を着て鳥打帽を被つたまゝ、風呂敷包を側に置いて、忙しさうに飯を食つてる男があつたが、箸を置くと、直ぐ勘定を濟ませて、目をぎよろつかせ、あたふたと出て行つた。

予は勢のよい血汐が全身に漲つて壓へ切れぬやうで、處もかまはず、「王郎酒酣」を歌ふ。小野君はくづれかゝつた膝に兩手をくの字なりに突いて、謠曲を低い聲で謠ふ。節まはし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が玄人ぶつてゐる。

「貴方は謠曲を稽古したのですか。」と、予は驚いた。

「四五年前に一寸やつたことがありますよ。」

「綽々として餘裕ありですね、貴方にそんな風流の嗜みがあらうとは豫想外だ。」

「なあに風流だなんて、そんな氣樂な量見で始めたんぢやないのですよ。私にやね、津崎君のやうに大びらで不平を云ふ元氣はなし、さうかつて、外の人のいやなことは自分にもいやだし、どうかして鬱憤を晴らして、苦勞を忘れようと思つてね、會計の竹山君の後へ喰付いて、素人謠曲の組へ入つたんですよ、長屋で謠曲なんて、佐野常世の成れの果か、一寸洒落てまさあね。はゝゝゝ。」

「ぢや、お能も見にお出でせうね。」

「どう致して、お能拜見どころの騒ぎですか、まあ聞いて下さい。」と、小野君は居住ひを直して、「素人組の連中は、今月は梅若、來月は寶生と、見て廻つて色んな批評がありますが。私はそんな眞似は出來ないから、まあ『能樂』つていふ雜誌を社から貰つて、それを讀むのがせめてもの慰みだつたんでさあ。所が、その雜誌さへ社に没收されることになつて、私の手には落ちぬやうになつたのです。それが社の規則だから仕方がない、社の方ぢや屑屋へ賣つても、一錢か二錢だらうが、私にとつちや、大變な樂みで、月々心待ちにしたんですがね。朝に一城を奪はれ、夕に一國を奪はる、拙い譬だが、弱い者はます〳〵權力を剝がれてしまふんだ。そこで私あ、すつかり斷念しました、謠曲も止めて、夕食でも濟むと茶を飲んで、ころりと横になつて、天井の蜘蛛の巣でも見てるんです。」

平生表情に缺けてゐる小野君の顏も、憂色を帶びて來る。

「だつて雜誌一册位、譯を云へば吳れんこともないでせう。」

「いや、それを主張する丈の元氣があればいゝんですがね。何時かも、物價は高くなる、子供は殖える、困り切つた擧句、五重の塔から飛下りる氣になつて增給を願ひ出たんです。すると、今ので不服ならお止めになつても差支へはないと嚴命が下るんです、丸で雷に打たれた氣でさあ。つまり私のやうな無能な者は、社でも必要でなければ、世間にだつて不用な者だ。生きてる丈が有難いお慈悲だと思ひ返してるんですよ。」

へゝゝゝゝと凄く笑つて、「や、斯うしちゃゐられない。子供に春着一枚も造つてやらないで、親爺が酒を飲んでもゐられまい、さ、歸りませう。」と、よろ〳〵と立ちかゝつた。

予は勘定を引受けて、外へ出た。小野君は「濟みませんなあ。」と數十度云つて、予に別れてとぼ〳〵と小石川の方へ行く。予は暫らくその後姿を見送つたが、小野君は荷車にぶつつかつて頻りに詫をしてゐた。

その翌日、出社すると、小野君は元の石地蔵で、何處を風が吹いてるかと、冷然としてゐる。築島や大澤は相變らず、パンを嚙つて氣焰を吐いてゐる。予も亦一日を校正に過されぱならぬ。已れには將來があると、心で慰めながら。

玉突屋

「二本歸り三つ！」と、ボーイは蟲の喰つた出つ歯を出して大聲で叫んだ。彼れは薄い座蒲團の上に几帳面に坐つて、兩方の袖を搔き合はせてゐる。年齡は十五六で、顏は青くて脹れて、髮の毛は薄い。

背廣を着たでつぷり肥つた男は、臺にすり寄つて身を屈め、鳥差しが鳥を狙ふやうな態度で、キューを突出した。

「三つ！」と、ボーイは袖口から細い棒を出して、ゲーム盤を動かし、横を向いて欠伸をした。

向うの一臺は突手もなく、四つの玉が侘しげに片隅に抱き合つてゐて、瓦斯の光は鈍いが、手前の一臺は明るい光の下に、紅白の玉が追ひつ追はれつ縱横無盡にころがつてゐる。ストーブを後に、キューを逆に突いて、帶を緩くだらしなくしたまゝ立つてる角帽の青年は「又やられさうだな。」と呟いて、相手の突振りを見てゐたが、急に後を顧みて、「中原、後で君ともう一度やらう。」と力んで云つた。柱にもたれてワッフルを抓んでゐた中原は、時計を見て、

「もう十二時ぢやないか、明日にしよう。」と落着いた聲で云ふ。

「いや、明日は芝へ行つて、あの話を定めて來なくちやならん。」

「なに、芝の方は急がなくてもいゝさ。」

「だつて早く定めなければ氣になつてならん、相手が愚圖だから。」

「急勝ちだね。」と、中原はゲーム盤を見て、

「栗山さん、今日は全勝ですね。」

「へゝゝゝ」と、栗山はキューを扱いてゐたが、コツツと音がして、手玉は外れたので、「こりやどうした。」と、禿頭をつるりと撫でて、厭な笑ひをして、ストーブの側へ來た。

「さあ、一キューで取切るか。」と、角帽は勢よく立上り、チョークをギシ〳〵付けながら玉臺を見て、チエッと舌打して、「厭な玉だね。」と、首を二三度捻り、「から行つてから來るか。」と臺の上に乘り上つて、邪慳にキューを出した。兵兒帶がだらりと垂れる。

「二つ。」と、氣拔けのした聲でボーイが呼ぶ。

「おい五だぜ、確かり見とれ、ゲーム取りならゲーム取りらしくするんだぜ。」と横目でじろりとボーイを見た。

「五つ。」とボーイは數へ直して、目をぱつちり開けたが、

次第に上目蓋が垂れて來る。生欠伸が喉を突いて來るのを漸く嚙み殺したが、涙が目に浮ぶ。

角帽は眉を顰め、口を捻り、首を動かし、襟を寛くボタンの取れたシャツの廣く出てるのも關はず、熱心に突いてゐる。栗山は葉卷の先を爪でつゝきながら、「玉は今時分からよく突ける、不思議なものだ、世間がしんとして來るとキューも冴えて來る。」と、ストーブに顏がほてつてゐる。

「ぢや、今夜は徹夜して突きますか。」と、角帽はクションの方を目で計つてゐる。ボーイは氣遣はしさうに栗山の顏を見てゐたが、栗山は「へゝゝゝ、徹夜も面白いな、明日は日曜だし。」と、悪くすると徹夜案が成立しさうなので、幽かに溜息をついた。で、坐り直して足の痺れを撫り、ぺこ〳〵の腹に力を入れ、「一つ。」「二つ。」「三つ。」と付元氣で叫んだが、頭は次第に下つてぼうつとする、と、身體が地べたからする〳〵と引上げられるやうな氣になり、そのまゝ遠い處へ持つて行かれさうになつたが、ガチャツと音がしたので目を細く開けて、「三つ。」と夢心地で叫んだ。十二時が打つた。

栗山は火の熱で汗ばんだ手に白粉を振りかけ、立變つてキューを執り、「早いものだ、もう十二時だ。家に居りや、とても今時分まで起きてらりやしない。」

「中原、昨夜の今時分はどうだい。」と、角帽は意味ありげにやゝ〳〵と笑つてゐる。

「フ、ン。」と、中原はコークスを指先で抓んで、ストーブへ投げ込み、「お蔭で今日は二時頃まで寢てしまつた。」

「起きては玉を突き、飲んぢや寢てりや、それで春は來るんだが、どうもかう玉突屋にばかり日參してても困るよ。」

「いゝぢやないか、學問で食へなきやキューボーイになるさ、その方が洒落てるぜ、フツ〳〵〳〵。」

「それも呑氣でいゝね、しかし何時までもこんなことをして遊んでもゐられまいよ。」

「良心が咎めるか。君やそんな事をちよい〳〵考へ出すから、酒も玉も上達しないんだよ。」

「さうだね、少くとも君を對で負かす程にならなくちや癪に觸らあ。」と、ワツフルの殘りをむしや〳〵平らげた。

「勝負有。」とボーイは三人の顏を順々に見たが、北風が玻璃窓に吹きつけるので、音を聞いただけで首をすくめて、兩手を前垂の下へ入れて背を丸くした。

「さあ、も一度。」と、角帽は目を光らせて、玉を並べる。

ボーイは恨めしげな顏付をして、「栗山さん、も一ゲーム如何です。」と哀れな聲で云つた。

「もう遲いから止さうか。」と、栗山は迷つてゐる。

「一時前か。」と、ボーイは獨言のやうに云つたが、角帽は帶を締め直して威勢よく、

「なあに、まだ十二時を十五分過ぎたばかりさ、十分もあれ

ばゲームになりますよ。」と促すので、栗山は時計を見て、「今二十分だね、ぢや、やるかな。」とキューを執つて、「どうです、十位下げますかね。」

「なあに大丈夫、今度負けたら玉はお止めた。」

「いや、君の止める〳〵も當てにならんよ。」と、中原は腰を掛けたまゝ足拍子を取つてゐる。

ボーイはゲーム盤を直して、「二つ。」「三つ。」「五つ。」と數へ出したが、少し當りが途切れると、前に屈みさうになる。眠りをまぎらしたくも、軍歌も歌へず、足も動かせず、手も動かぬ。で、詮方なしに、齒を喰ひしばり目を見詰め心を凝らしてゐると、かつとした目眩い光が前に擴がつて、青い臺と白い玉と紅い玉とが、浪の上にでも漂うてゐるかの如く見える。しかし、無意識に「二つ。」「三つ。」と叫んでゐたが、やがて口も目も緩んで、心がとろ〳〵になり、自分の故郷で、弟を連れて繡眼兒捕りに行つてる氣になつた。枝の上に綠の羽を重ね合つて、一處にピー〳〵鳴いてゐる。で、竊竿を持つて近寄らうとしたが、身體が縛られてるやうで近づけぬ。矢鱈に藻掻いてると、ズドンと音がして、鳥は飛んでしまつた。

「おい、吉公。」と、角帽は怒鳴つて、「居睡りなんかしないでゲームを取れ、今までよく數へなかつたんだらう、聲がしなかつた。」

「いえ、數へてゐたんです。」と、出鱈目に數を取つて、「十八ゲーム。」

「ふゝん、いよ〳〵取切るか。」と、角帽はにこ〳〵して臺を廻つてゐる。

「さあ、それが濟んだら、おれが最後の一擊を與へて歸ることにしよう、もうそろ〳〵眠くなつた。」と、中原は欠伸をした。

夜番の拍子木が、地の底からのやうに幽かに聞える。

ボーイは、百年も千年も「二つ。」「三つ。」と繰返し〳〵叫ばねば、打倒れて熟眠は出來ぬ運を背負つてるやうに感じて、涙聲で「當りゲーム。」

何處

可愛い目元をほんのり酒に染めた女が高くさし掛けた傘の下に入つて、菅沼健次は敷石傳ひに門口へ來た。

「ぢや明後日、屹度ですよ。」と、女中は笑顔で覗き込み、艶氣を含んだ低い聲で云つた。

「むゝん。」と健次は女の顔をも見ず、引たくるやうに傘を取つて、さつさと急ぎ足で歩き出したが、五六間も歩んで我知らず振返ると、「鳥」と行書で書いた濕つた軒燈の下に彼女がぼんやり立つてゐる。

健次は何の譯もなく微笑する。女も微笑して、胸を突出して會釋する。

それも一瞬間で、健次は傘を肩にかけ、側目も振らず上野の廣小路へ出て、道を山下の方へ取る。

昨日の天長節に降り通した雨は、今日も一日絶間なく、濕つぽい夜風が冷たく顔に吹き當る。往來の人々は皆傘を斜めに膝を曲げて、ちよこ〳〵と小股に急いでゐる。健次も膝から下はびしよ濡れになつたが、敢てそれを氣に留めるでもなく、只いゝ氣持で、口の内で小唄か何か呟いて、沈んだ空へ酒臭い息を吐きながら、根岸の近くまで來ると、横合から底の深い大きな蝙蝠傘が、不意に健次の蛇の目にぶつ附かる。チエッと舌打して避けようとする機會に、蝙蝠傘の男が聲をかけて、

「やあ君。」と立留まつた。

健次は少し驚いて、

「やあ君か、何處へ行つた。」

「君の家さ、今夜は雨だから、屹度ゐるだらうと思つたのに、何處を浮れてゐた。いゝ顔つきをしてるぢやないか。」

「そりや氣の毒だつたね、これから僕の家へ行かうぢやないか。」

「いや、もう遲いからよさう。」と、蝙蝠傘の男は長い身體を屈めて、下駄屋の時計をのぞいて見て、「もう彼れ此れ九時だね。」と一寸考へ、「實は君に少しお賴みがあるんだが……此處で話してもいゝが、どうだ其邊の珈琲店へでも寄つて呉れんか。」と、首をまはして周圍を捜す。

「ぢや、さうしよう、この先にいゝ家がある。」と、健次は先に立つて、半町ばかり泥濘の中を通つて、擦玻璃に一品亭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com